

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日 通称若林の秋水 雑誌社第六一七号
昭和二十三年七月一日発行 (第百二十四巻第七号)

ホトトギス

七月号



風雅の小筥（四十二）

廣太郎

雑詠選をする時、微妙な漢字の間違いというのは結構気になるものである。確かに選をする方にとつてもそのまま見逃してしまうような間違いでも最終的に校正の段階で指摘され、実際選を取り消した例もある。代表的な間違いの一つとして今思い出すのが「堀」と「掘」という漢字で、もうお判りの方も多いだろう。この二文字土偏と手偏の使い方で、最近多いのが「掘る」等というように動詞に土偏の方を使われる間違いである。「間違いと判ってんねんから校正で直したらええやん」

という声も聞こえてきそうであるが、よほど句として素晴らしいと思われ
るものは考えるが、やはり選者とすれば採り難いものである。口幅つたい
申し上げ方でお許し頂きたいが、やはり投句に対する真剣さという点で残
念に思ってしまうのである。

これも色々な機会に書いた話であるが、もう十年以上前の話であるが、
実際ホトトギスの投句者から電話を頂き、それは、雑詠の投句用紙を紛失
したので用紙だけ送って欲しいというのであるが、用紙だけではお送り出
来ないとお断りした。すると次の日又その方から電話で用紙が見つかった
という事であった。何と見付けた場所は、その方の家の神棚であり、ホト
トギスが届くと先ず用紙を切り離して袖棚にお供えして入選を祈願して、
そのままそれを失念していたという事であった。過去ホトトギスに一句で
も入選すると赤飯を炊いて近所に配った話もあり、選者としたら「雑詠」
は徒や疎かには出来ないのである。

旬日記 汀子

令和二年七月四日 芹屋ホトトギス会

一年を巡る早さよ月見草

金魚には金魚の時間ありにけり

健康は宝梅雨さへ寄せつけず

七月五日 下萌旬会

一仕事又一仕事合歡の花

体調をととのへゆかん雲の峰

送り終へたる一稿や雲の峰

よべ咲きし月下美人の香の残る

ほつとする聞なく仕事をこなす夏

七月六日 ロイヤル俳壇

出席の出来し安堵の露涼し 友一人見送りて来し雲の峰

シヤンデリアには羅の似合ひけり 訃報又梅雨の一日でありしこと

露涼し椅子の配置も考へて 亡き席に薔薇一と抱へ活けられし

いつもより広き部屋とて露涼し 友偲ぶ一日大切薔薇活けて

出席は元気の証露涼し 大阪倶楽部出句

七月九日 清交社

日傘よりはみ出してゐる背巾かな 水無月の予定立たざるころも又

何よりも心届きぬ水を打ち 治さねばならぬ体調梅雨に処す

打水の乾きし跡と見て訪ひぬ 七月十四日 綿業倶楽部

ヘルベスの痛みに耐へてゆく暑さ 記憶又かの日呼び寄せ夾竹桃

夏潮旬会出句 旅幾つあきらめしこと露涼し

なつかしき思ひ出ばかり偲ぶ夏 赫よりも白と答へて夾竹桃

雲の峰しばらく空の旅に出ず 取り戻す元氣幾度露涼し

手に這はせなかなか発たぬ天道虫 運転もししばらく休み露涼し

廣太郎句帳 廣太郎

令和二年七月一日 NHK文化センター

水無月の水惑星の水禍かな
甚平に一と日の罪を預けけり
再会を明日に控へて髪洗ふ
禁酒解く先づ一杯のビールより

七月二日 蕉心会

水の色雲の動きも半夏生
ジグザグといふ夏蝶の乱舞かな
青鷺の視線に水面固まれる
久々の句座てふ暑中見舞かな
夏潮に逆行したる小舟かな
白南風に鴉は高さ競はざる
箱庭の失せて山崎氏は如何に

七月三日 カトリック新聞選者吟

涼風に漣絵画めく水面
七月四日 荻屋ホトトギス会

不機嫌な金魚てふ尾の揺らぎかな
川床灯り五山は高さ失へり
東京を五ヶ月ぶりに出し帰省
月見草三瓶の旅は叶はざる

七月五日 青風会荻屋例会

雨音とショパンに浸る端居かな
夕端居君と人生分ち合ひ
電話魔になる母月下美人の夜

七月九日 土筆会不在投句

水中花にも枯れ色といふ矜持
五百年城の盛衰知る噴井
口ザリオの玄義に揺る水中花
赤勝ちにお花島の出来上る

七月十三日 朝日カルチャー若草句会

鬼百合の丈に百草従へり
雲の峰日を呑み込んでゆく仔細
雲の峰都心の午後を奪ひゆく
登山杖十五代目に譲られし
登山小屋明日頂上といふ熟寝
百合の香に現れてガブリエルの矜持
黒百合に夜の帳の降りゆけり

七月十四日 悼 千原叡子様

遺されし椿子館の灯涼し
七月十五日 北國文芸選者吟

黒百合の夜は星空と呼応して
七月十六日 前議員句会

竹林の風も過客や夏館
古扇風新しくしてをりぬ
端居して世の喧騒を遠く聞く
打水にビジネス街の甍る

七月十六日 登高会

噴水の秀の先にある未来かな
サングラス掛ければ孫の遠ざかる
葛餅の半透明にある憂ひ
サングラス外しミサへの一歩かな
サングラス僕はレイバン君グッチ

噴水は上がり鳥語は降りて来る
葛餅や匙にぶるんと主張して
七月十七日 廣邦会

七月や水の憂ひを乗せて過ぐ
七色といふ噴水の夜の顔
噴水の前に始まる恋路かな
七月二十一日 目黒学園句会

雨男とて喜雨ならば許されよ
喜雨降つて色の生れし田畑かな
茗荷汁六十年を添ひ遂げて
七月二十五二十六日 野分会夏行リモート句会

秋近し鏡に映る丸き背ナ
病葉も彩りとして館の庭
又一人虚子の許へと秋近し
病葉の翻る時山動く

摩天楼押し潰したる雲の峰
夜の秋明日を占ふ風の色
水中花泡放ちて朽ちゆけり
黒揚羽影に吐息を鎮めゆく
七月二十八日 若水句会

ハンカチを拾ひてよりの恋心
名園の端に暮れ残る百日紅
夜の秋ショパンの調べ風に乗
ハンカチを畳み思ひ出閉ぢ込める
七月二十九日 NHK文化センター

夕星を誘ひ出したる夜の秋
女王花闇吸ひ取つてゆきにけり
空蟬に残せし土の記憶かな

雑詠

廣太郎 選

春寒し悼む暗さのタワ一の灯 長岡 安原 葉
 悼む日の心に更けし春の星 同
 三月も半ば北国まだ荒るる 同
 下手な句を後生大事に老の春 相模原 木村享史
 嗤はれるほど虚子が好き老の春 同
 虚子謂ひし宇宙を詠まなホ句の春 同
 わが窓にほんのひととき舞へる雪 東京 今井千鶴子
 お隣の屋根に落ちさう春の月 同
 春の月したたりながら渡りゆく 同
 煮凝や夕べの噂閉ぢ込める 西宮 本郷桂子
 この雨の音が運びし春隣 同
 旗揺れて門に来てゐる紀元節 同
 冬うらら疫病の国と思はれず 熊本 岩岡中正
 バテレンの島へ白波日脚伸ぶ 同
 ひたすらに使徒のごとくに麦を踏む 同
 濃き闇をめがけ的無き鬼やらひ 香川 湯川 雅
 昔人の足小さからん板踏絵 同
 ほつほつといふ数をこそ梅見頃 同

黒板に最後の授業春の雪 神戸 藤井啓子
 アスリート生命賭けし二日灸 同
 七時よりリモート句会菜飯食ぶ 同
 若沖の象まつ白しあたたかし 東京 田丸千種
 爪先のラメに散らばる春灯 同
 活版に戀と印字や紙の春 同
 下萌えて風に吹かるることを知る 袋井 湖東紀子
 湖の音なく濡るる春時雨 同
 鈴の音して恋猫の現はるる 同
 快癒するつもりで来る避寒宿 加須 岡安紀元
 サンドルで行けさうな道梅探る 同
 探梅のしんがりにてなほ遅れ 同
 寒明の風にまぶしき雲となる 能ヶ崎 今橋眞理子
 冴返る星座ふたび光得て 同
 地より香の湧き上がりたる梅月夜 同
 極月の空に秒針あるごとく 同
 風花や陶土にまじるガラス片 同
 年男窯火に祈ること多し 同
 海苔搔いて波より高き女声 神戸 山田佳乃
 海瘦せしことを嘆きつ海苔を干す 同
 海苔粗朶を潜りて舟の一日かな 同
 黒南風や森の輪郭ざわざわす 東京 今井肖子
 限りなき空の深さを水馬 同
 空つぼのリビングルーム百合の闇 同

雑詠句評（六月号より）

チェロを聴く霜夜の星の瞬きに 福島 加藤あけみ

しんしんと冷える霜夜に星が美しくまたたいている。そんな静かな夜に、テレビかCDか、チェロの演奏を堪能しているのである。寒さは厳しいけれども、心豊かな一刻なのであろう。（純也）

楽器の中でもチェロは、人間の声の幅と一番近い音階が出せると聞いた事があり、その美しい音色が人々を古今魅了してきた。バッハの無伴奏チェロ組曲に代表されるように、名曲も数多あるが、冬の寒い夜、星の下ではどんな曲だろう。サン・サーンスの「白鳥」等は如何であらう。（廣太郎）

押さへても風の湧き出す落葉籠 袋井 湖東紀子

掃き集めた落葉を籠に入れると、嵩張つてすぐに籠からはみ出してしまふ。はみ出さないように押さえつけてもやんわりと元の嵩に戻ろうとするのである。この場面を作者は「風の湧き出す落葉籠」と捉えたのである。

葉芽となつてから地に落ちるまで色々な風に吹かれてきた落葉は閑かに在るときにも内に風を溜め込んでいるのかも知れない。こんなことを思うと「風の湧き出す」ことは何の飛躍でもなく至つて落葉の本質ではないかと思えて来る。

作者の新体感覚を通し、落葉そのものに寄り添つて出来た「落葉籠」の一句と思う。（しげ人）

落葉の嵩で一杯になつた落葉籠も、その上から押すと結構スペースが空くものである。それでも又反動で元の嵩になつてしまふ事もあり、結構四苦八苦している情景に出会うものである。その様子を、何か風神の仕業のようにも見え、落葉自体が生きているようにも見えるところが愉快である。（廣太郎）

天地有情

心子選

指折りてまだ数へ日といふは先
 虚子よりも生きて凡なり寒椿
 還らざる日々鬼灯の音色にも
 父逝きて四十年や穴まどひ
 卒業の掛け合ひ聞いてゐる泪
 夜明けかと紛ふ玻璃戸の雪明り
 桃の花一書たづさへ師の許へ
 わが庭の狭きながらも梅椿
 娘来てなやらひゆきし宵のうち
 地震振るや一人暮らしの夜半の春
 どこの梅よりも狭庭の一樹こそ
 枝垂梅群なす目白取りつかせ
 良き知らせありし予感や雛祭
 沈黙は金雛たちに会話なし
 御身 呉 呉も 大事に 冴返る
 麦踏んでひたすら祈ることのあり
 海見えてきて探梅の道となる
 海光に見失ひたる寒椿

相模原 木村享史
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同
 同 今井千鶴子
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 宇治 西村やすし
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同

手遊に折鶴立てて雛立てて
 豆雛にしかと槍扇笏のあり
 凍解の大地の匂ひ立ちにけり
 義理と見せ本気のパレンティンチョコ
 水音の散らす梅が香巡りたる
 人は旅叶はず鳥は帰りゆく
 雨上がり春の山へとなりゆける
 稿の想浮かばぬ夜の余寒かな
 春愁を払ふ鏡の手入れより
 真つ新たなレースカーテン春迎ふ
 紅も 真白も 零れ 梅日和
 此の熱は絶対ただの春の風邪
 冴返る 富士の 頂模 様 替
 残雪を宝物のごと都会の子
 梅が香の風が自由に出入りの戸
 ものの芽のうごめき初めし日和かな
 立子忌も虚子忌も無くて会へぬまま
 初音きく人生の坂ゆつくりと

神戸 和田華凜
 同 同
 枚方 中嶋陽太
 同 同
 宝塚 水田むつみ
 同 同
 神戸 山西商平
 同 同
 同 千原葉子
 同 同
 大阪 酒井湧水
 同 同
 東京 河野昭彦
 同 同
 西宮 本郷桂子
 同 同
 鎌倉 星野 椿
 同 同